慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ソヴェート五ケ年計画とその技術論
Sub Title	
Author	藤林, 敬三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1934
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.28, No.3 (1934. 3) ,p.337(37)- 379(79)
JaLC DOI	10.14991/001.19340301-0037
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19340301-0037

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ト五ヶ年計畫こその技術論

技術に関する私見

ソヴェート技術論の内容

八 電化問題 六 社會主義的技術 六 社會主義的技術 五ケ年計劃に對する技術論一段

人的技術

ō

ソヴェート五ケ年計畵さその技術論

(三三七)

進的努力が挑はれつくある。 義社會の建設の經濟的技術的基礎が確立せられ、引き續き現在の第二五ケ年計畫遂行に依つて、その完成化への前義社會の建設の經濟的技術的基礎が確立せられ、引き續き現在の第二五ケ年計畫遂行に依つて、その完成化への前 れて居る許りではなく。一九二八年十月に始まり一九三二年末に終つた第一次五ケ年計畫の遂行に依つて、社會主れて居る許りではなく。一九二八年十月に始まり一九三二年末に終つた第一次五ケ年計畫の遂行に依つて、社會主 資本主義發展の最も赤裸々なる情勢を現はしてゐる。これに對して、他方では、ソヴェート聯邦は世界恐慌から離 際的協調が悲慘にも現實にその不可能を暴露して以來、各國は自衞的經濟政策とその國際的對立の激化とに於いて、 持續的な恐慌の裡に混亂し、今尙ほ世界恐慌の過程から逃れ得ない許りではなく、この恐慌に對する資本主義の國 民生活の諸方面に於いて多くの異質的な樣相を展開した。即ち、一方では世界の資本主義諸國が一九二九年以後の民生活の諸方面に於いて多くの異質的な樣相を展開した。即ち、一方では世界の資本主義諸國が一九二九年以後の ト聯邦と世界の他の資本主義諸國との二つの異なれる經濟體制は、最近數ケ年の間にそのそれよくの國

勢から、特に各國の軍需工業に關する技術的發展が顯著ではあるが、それは帝國主義戰爭への準備工作としての異勢から、特に各國の軍需工業に關する技術的發展が顯著ではあるが、それは帝國主義戰爭への準備工作としての異 否定するものでないにも拘らず、 かくて世界の資本主義諸國とソヴェートの經濟的發展の技術的基礎に關する諸現象も亦自ら異なる情景を示してかくて世界の資本主義諸國とソヴェートの經濟的發展の技術的基礎に關する諸現象も亦自ら異なる情景を示して 獨占が競爭を完全に排除しないものである以上、恐慌の影響は資本主義的産業の技術的發展の動因を決して 抑壓せられ、且つ破滅の狀態にまで陷られて來てゐる。-資本主義諸國の産業技術はこの敷年間、到る處に於いて、種々なる産業部門を通 唯だ最近の世界經濟情

比較して凡そ次ぎの如き諸特質の裡に現はれてゐる。 これに對して、 ソヴェ ト産業の技術的發展は國民經濟發展の全般的基礎として、資本主義的産業技術の發展に 即ち

- (一)技術的發展の急速なるテンポ。
- (二)生産力の地理的配置、全國工業化政策、及びコンビナートの發展。
- (四)各種産業部門の均衡的統一への方向。

のであると云はねばならぬ。 一の問題は、寧ろ今後の産業的發展に於いて實現せられねばならないものではあるが、 は現にソヴェート産業の技術的基礎の統一化として顯著なる意義を持つものである。尚ほ各種産業部門の均衡的統 特に電化問題は、レーニンが「共産主義とはソヴェート權力に加へるに全國の電化である」として重要視したる ーそしてこのレーニンの提言に基く、全國電化計畫が正に五ヶ年計畫に發展したのであるが一 既に傾向として特質的のも それ

識的、積極的參加者としての訓練と教育とを受けるのである。能し 教育に於いて又自ら異れるものがある。即ち其處では勤勞階級は技能的に、精神的に、 以上の諸點は物的技術の特質的發展を示すものであるが、これに相應ずる人的技術の方面では、勤勞階級の經濟 社會主義的建設のための意

註一《私は最近別の機會に、甚だ不充分ではあるが、これ等の問題に關する論述を試みたが故に、此處ではこれ以上に述べ

ト五ケ年計勘さその技術論

三九 (三三九)

る必要を認めない。これに關しては讀者は左の抽稿を參照せられたし。

抽稿。ソヴェート五ケ年計畵の技術上の諸問題。C慶應義塾産業研究會編、世界經濟戰と我國産業の動向り

異なれる傾向を示しつゝあると見なければならぬ。勿論この方面では決解せらるべき問題が尚ほ多く將來にかゝつ 要之、ソヴェー ・ト産業技術の發展は資本主義のそれに比較して量的に異常なるものあると同時に、 質的には旣に

的技術の意義を見出し得るのである。 論に依つて指導せられて居り、從つて吾々は其處に、現在のソヴェート産業技術の裡に、尙ほ本質的には社會主義 事實は明かに認められる。しかし乍ら、ソヴェートの社會主義建設の總ての實踐は、マルクス=レーニン主義の理事質は明かに認められる。しかし乍ら、ソヴェートの社會主義建設の總ての實踐は、マルクス=レーニン主義の理 ぎく〜の計畵的努力に依つて補足せられて行かねばならない。かくて未だ當分はソヴェートの計畵經濟的努力の種 々なる方面に過渡期的性質が現はれるのは止むを得ない。かくて現在のソヴェートの技術的建設過程の上にもこの るまでには、未だ多くの歳月を必要とする。第一次五ケ年計畵は、云ふまでもなく、第二次五ケ年計畵及びその次 關聯して、技術發展の意義を求めるとすれば、吾々は其處に資本主義的産業技術とソヴェートのそれとの間に反對 傾向のものを見出すであらう。 かくの如くにして、更らに最近數ケ年間の世界各國の諸國民の經濟的發展、國民の社會的、文化的生活の樣相とかくの如くにして、更らに最近數ケ年間の世界各國の諸國民の經濟的發展、國民の社會的、文化的生活の樣相と 勿論ソヴェート産業技術が社會主義的技術としての具體的な意義を全般的に發揮す

「改造の時代に於ける技術が總でを決定する」と云ふが、正に五ケ年計畵と共に、ソヴェートは技

ーリンが

ばならね。 の實践、或は他方現在の資本主義諸國の實狀に對應する、マルクス=レーニン主義の解見の發展であると見なけれ 年計畵に依る技術的建設を理由づける彼等の見解を知ることである。云ふまでもなく彼等の見解は、マルクス、エ ンゲルス及びレーニンの見解に基くものであるが、之れは單に學說の單なる反覆ではなくして、現在のソヴェート 技術革命の時代の實践に對して、指導的役割を演ずる社會科學上の見解が、五ケ年計畫の開始と共に多くのソヴ ートの指導者或は學者に依つて新に問題とせられたのは當然である。私の本論に於ける目的は,讀者と共に、五ケ 術的變革、技術革命の時代に入つて居ると考へられいは三共處では技術の發展が最も重要なる役割を演する。こ

拙门 N. Bucharin; Die sozialistische Rekonstruktion und der Kampf um die Technik, 1931, S. 13.

_

論的基礎も必ずしも明かにせられては居ない。今此處で、私はこの點に關する諮種の見解を檢討し、批判するため 確に規定せられては居ない。從つてまた、何を以つて技術的發展とし、技術的進步と做すか、に關する明確なる理 豫猶を持つて居ないが、本論に入るに先つてこれに關する私見を簡單に述べて置くことが便宜である。 從來「技術」なる言葉は、日常語としては、多種多樣の意味に用ひられるのであるが、また學問的にも必ずしも明

の傾向の社會科學者に取つても大體承認せられてゐる見解であると見做し得るのであるが、 マルクス主義の見解に於いては、通常、 技術とは勞働手段の體系であると考へられてゐる。そして此の見解は他 私はこの通常の見解よ

ト五ケ年計画さその技術論

四一

なるものを技術と見做し得ると考へる。

如き分析に於いて不充分であると云はなければならぬ。 たものにあるのではないことを見失つてはならない。技術を以つて單に勞働手段の體系なりとする見解は先づ右のたものにあるのではないことを見失つてはならない。技術を以つて單に勞働手段の體系なりとする見解は先づ右の 合には何等かの形で具體化された手段に轉化するものではあるが、尙ほ技術の中心が方法にあつてその具體化され ことが出來やう。過去の歷史に於いては勞働過程、從つてまた生產過程に於いて最も重要な役割を演じて來たもの 産であつて、勞働過程に於ける勞働生産力の增入に役立つ方法、並にその方法の具體化されたものである」と云ふ ものではなくして、人間の創造の所産である。從つて技術を抽象的に定義するとすれば、「技術とは人間の創造の所 凡そ技術は勞働過程に於いて勞働生産力の增大に役立つものであり、且つ技術は單に自然に依つて與へられたる 共にそれは勞働生産力增大のための方法の具體化されたものであり、そして勞働生産力增大の方法は多くの場共にそれは勞働生産力增大の方法は多くの場 單純なる道具から自動的機械體系への技術の發展であつた。しかし乍ら吾々は此處に道具と云ひ、機械と云ふ

には技術との闘聯を持つ。しかし乍らとの場合に於いてはその品質を決定した技術との闘聯はい 的には旣に加工せられたる原料としての品質として現はれる。右の第一の場合には技術との關聯はなく、後の場合 はその品質の如何に依つてである。そしてその品質の如何は本源的には全く自然に依つて決定ぜられて居り、二次 然らば勞働手段の體系以外に如何なるものが技術として考へられるか。技術は生産力の增大に役立つものである 一般に生産力決定の諸要素は勞働手段と勞働對象と勞働力とである。この內勞働對象が生産力に影響を持つの一般に生産力決定の諸要素は勞働手段と勞働對象と勞働力とである。この內勞働對象が生産力に影響を持つの 例へば原料生産に

にある。私はこの問題に對して肯定的な立場を取るものである。 念との關係を再びする必要がない。其處で問題は、生産力の要素としての勞働力に關して吾々は技術を考へ得るか、 勞働力とを、更らに技術との關聯に於いて考察する必要があるが、勞働手段に關しては前述の如くであつて技術概 於ける勞働手段の如何にかゝつてゐると考へられる。かくて吾々は勞働對象以外の生産力の要素として勞働手段と

これを物的技術として適當に區別され得るであらう。 係するからである。《註三》そしてこの人的技術に對して、 つて、物的な手段ではなくて方法が重要なものとして現はれる。かくて勞働力支出の方法自體を合理化することに 容易にせられるが、常に必ずしも物的な手段を必要とするものではなく、從つて此處では、勞働手段の場合とは異容易にせられるが、常に必ずしも物的な手段を必要とするものではなく、從つて此處では、勞働手段の場合とは異 た勞働方法に關する敎育の如きがこれである。そしてこれ等の方法はまた特殊の物的な手段を用ゆることに依つて 術の存在を認めなければならぬと考へる。即ち、例へば、勞働方法の合理化、勞働力配置の合理化の如き、或はま れる。そして人間の勞働力支出を合理化することは勞働生産力を增大せしめる所以であつて、私は此處に明かに技れる。そして人間の勞働力支出を合理化することは勞働生産力を增大せしめる所以であつて、私は此處に明かに技 の勞働は精神的並に肉體的な活動であつて、勞働力は生理的並に精神的エネルギーの支出に於いて發輝せら 勞働生産力の增大に役立つ方法を人的技術と稱していく。蓋し人的技術は勞働過程に於ける人的要素に關 勞働手段中に具體化されて居べ勞働生産力増大の方法は、

註三』此處に私の云ふ人的技術は、例へばゴットルの云ふ個人的技術、知的技術と直ちに混合さるべきものではない。(Gottl-Ottlilienfeld; Wirtschaft und Technik, 2. Aufl. 1923) 叉吾國に於いても最近,勞働の熟練、個人的技能或は知能が、物的

ソヴェート五ケ年計画こその技術論

術なる言葉が通常個人の技能について代用せられることをも想起せられ度し-勞働手段の體制と技術〔唯物論研究 第十五號〕〕。個人的な熟練、技能、或は知能それ自體は技術ではなくて な技術と對應するものとして、またそれ自體が技術なりと考へられてゐる場合もあるが、〈戸坂潤著《技術の哲學。 岡邦雄 - 個人的な技能を如何にして增大し得るか 一讀者は技

各物的技術と人的技術とに關聯する。 然科學を基礎とする工學として、他方に於いては心理學と生理學とを基礎とする精神技術學と勞働生理學として、 けられると云ふ點に於いて初期の技術とは異なる。かくて今日技術と直接關係を持つ技術學は、一方に於いては自 また反對に科學が技術を生む、と云ふ相互關係に於いてゞあるが、何れにしても現代の技術は常に科學的に基礎付また反對に科學が技術を生む、と云ふ相互關係に於いてゞあるが、何れにしても現代の技術は常に科學的に基礎付 後には人間の科學的知識と相關際せしめられるやうになる。そしてとの技術と科學との關係は、技術が科學を生み 物的技術と人的技術とは共にその發展の過程に於いては、最初には人間の經驗の所産として存在したのであるが、

情に依つて決定せられる「誰四)旣に勞働對象の技術との闘聯は述べた。勞働者の熟練と生産過程に於ける分業や協情に依つて決定せられる「誰四)旣に勞働對象の技術との闘聯は述べた。勞働者の熟練と生産過程に於ける分業や協 増大に役立つものが、總て技術であるのではない。最も通常の見解では生産力の大小を決定するものは技術と勞働 の組織であるとせられ、またマルクスに従へば、「勞働の生産力は種々なる事情、なかんづく勞働者の熟練の平均程 物的技術と人的技術とは勞働生産力の增大に對して最も重要な役割を演ずるものであるが、しかし勞働生産力の物的技術と人的技術とは勞働生産力の増大に對して最も重要な役割を演ずるものであるが、しかし勞働生産力の 科學及びその工藝學的應用の發達程度、生產過程の社會的結合、生產手段の範圍及び作用能力、 **労働生産力の增進に尙ほ重要な關係を持つ。** 諸種の自然事

鮏四 マルクス、資本論、第一卷(高畠譯)一〇頁。

分業或は協業に於ける勞働力の配置を如何にして合理化し得るか、は人的技術の問題となる。

間の勞働をしてヨリ容易なるものたらしめることを意味する。 間の勞働に代置し、或は人間の勞働力をヨリ有効なものたらしめ、 て勞働力のみが積極的な要素であり、常に指導的な要因である。從つて單に生産力と稱せられることがあるけれど とは勞働力から切り靡されては生産力を質現し得ない。それ等は常に生産力の能動的な要素ではなく、これに對し 勞働手段、勞働對象並に勞働力は生産力の要素であつて、勞働過程を構成する。しかし乍ら勞働手段と勞働對象 それは常に勞働生産力として意義を持つものでなければならない。かくて技術に就いて云へば、物的技術は人 かくて一般に技術が勞働生産力の増大に役立つと云ふのは、勞働力の支出を相對的にヨリ減少せしめ、 人的技術は勞働力支出をヨリ合理的なものとす また人

個人の自由なる人格的發展を可能にする基礎を確實ならしめる。これ等の點に、吾々は技術の本質とその本來の個人の自由なる人格的發展を可能にする基礎を確實ならしめる。これ等の點に、吾々は技術の本質とその本來の 受ける自然からの拘束を緩和し、積極的には人間の自然征服力を増進する。そして最後には人間の自由なる發展、 ならしめる。がそれは同時に勞働過程に於いて、即ち對自然の人間の物質的生産過程に於いて、消極的には人間の つてしては未だ不充分である。技術は、從つてまた技術の發展は、最も直接的には勞働力支出の相對的減少を可能 しかし乍ら、吾々が技術の本質、従つてまた技術の意義を全般的に考察しやうと慾する場合には、右の述序を以

ト五ケ年計劃さその技術論

四

六

義とを求めることが出來ると考へられるであらう。

基礎の確立にあるとすれば、それは人間の社會的生活に於いては、勞働條件の改善、物的生活手段の增大、文化的水 かくて更らに、 技術の本來の意義が勞働力支出の相對的減少、 人間の自然征服力の増大、 並に自由なる人格發展

準の向上として現はれる。註むそしてそれはまた最後に人間の勞働の主觀的態度をも決定するに至る。註むかくの 如くにして、吾々は技術の發展の社會科學的考察に於いては、右の如き社會的諸現象の觀察に來なければならない。

誰六 つて條牛づナうし……
一つて條牛づナうし……
一つて修牛づナうし……
一つて修牛づナっし……
一つて修牛づナっし……
一つて修牛づナっし……
一つて修牛づナっし……
一つて修牛づナっし……
一つて修牛である。
一つている。
一つているこれる。
一つている。
一つているいるいる。
一つ -勿論今日の經營學は技術の本質をかくの如く解し得ないものではあるが。——しか技術の發展に關するこれ等の社會的諸現象は、技術に關する經營學的、經濟學的、 勿論これ等の諸研究は互

接には勞働條件の改善物質的生活の豊富化、文化的水準の向上に依つて條件づけられて居るが故に、 の全體に對してかくの如き態度を期待し得ることは、 術の問題であつて、それは技術教育の問題と並んで勤勞階級に對する教育問題の他の軍要なる一面をなしてゐる。) ば、今日のソヴェートに於ける勤勞者の社會主義的勞働態度は吾々の注意に値する。 處にまた勞働者心理學の研究に基いて、勞働生産力の增大に役立つ勞働態度を勤勞階級の間に生ぜしめることが 尙ほ相常の年月の後であると見なければならないであらう。 しかし乍らかくの如き勞働態度は直 ソヴェート勤勞階級 例へ

察たるに過ぎないものである。 ある。と同様に技術に関する諸現象も亦特殊の生産關係の し乍ら、技術概念、技術の本質及びその意義に闘する以上の所見は、單に一般的、 生産力が現實的生産力として現はれてゐるのは、 現實的なものとして現はれる。從つて私の先 常に特殊の生産關係の内に於いて 抽象的、 從つて非歴史的考

何に具體的に發展しつゝあるか、そして一般的な技術の本質及びその意義から見て、ソヴェ 般的な技術の本質と意義とは此處では技術の資本主義的意義と如何なる關係にあるか、これ等の問題が興味あるも ものとして考へられるかい のであるい 現はれてゐるか、を明にするものでなければならぬ。即ち、かくて吾々に取つては、一方に於いては資本主義諮園 に於ける技術が、資本主義的生産關係に依つて規定せられて、 述べた技術の社會科學的研究は、現實の特殊の生産關係の内に於いて、技術の本質及びその意義が具體的に如何 と同時に他方に於いては、ソヴェートの技術が、 これが吾々に取つてまた重要な關心事であらねばならない。CitC 社會主義的技術としての發展方向を規定せられて、如 具體的には如何なるものとして現はれてゐるか、 の技術は如何なる

註八 ことが出來れば、 に私見の大綱を傳へたに過ぎないものであつて、何れ更めて詳論するの機會を得度いと考へる。が若し讀者の示敎を得る 私の技術に闘する見解は既に別の機會に一度披瀝したことがあるが、出著 第五囘)それは素より充分に意を盡してゐないし、また多少不充分の點もある。そしてまた此處に述べた見解も單 私の最も幸ひとする所である。 資本主義産業と技術の問題、世界経済問

導理論とを窺ひ、 本論に入るに先つて多少多くの紙敷を費し過ぎた觀がある。 且つこれを批判するためには必ずしも無益ではなからう。 しかしそれはソヴェ ŀ の産業技術の發展とその指

既に述べたやうに、 ソヴェ 現在のソヴェ の技術に闘する社會科學的見解は、 マル クス、 エンゲルスト

ト五ケ年計畵さその技術論

として先づ理解することが目的であり、それ故に、必要なる場合以外にはマルクス=レーニンの見解に深く立入る がしかし乍ら、本論に於いては單に現在のソヴェートの技術理論を五ケ年計畵の實踐、技術的變革過程の指導理論 説に基くものであり、従つて前者の理解のためには一應後者の見解を知ることが必要であることは云ふまでもない。

現在のソヴェートの技術理論は凡そ次ぎの如き主内容を含むものである。

- (一)資本主義的技術に關する見解。
- (二)社會主義的技術に關する見解。
- (三)電化問題に關する見解。
- (四)人的技術に闘するもの、即ち熟練勞働者並に技術基幹部員の養成に闘する見解。

年計劃とは直接に關係のないものではあるが、社會主義的技術と對照して資本主義的技術が如何に理解せられてゐ るかを知ることは、また必ずしも興味なしとしない。かくて以下大體右の如き內容に從つて、順次ソヴェー 點に就いては以下適當の機會に關說し得るであらう。唯だ右の內資本主義的技術に關する見解は、ソヴェート五ケ點に就いては以下適當の機會に關說し得るであらう。唯だ右の內資本主義的技術に關する見解は、ソヴェート五ケ 在の技術論を見て行きたいと思ふ。 理論の内容を詳細に指摘するとすれば、例へば第一次五ケ年計畵の實踐に應じて、特に重工業方面への技 或は農業の集團化經營の技術的基礎に關する見解も、これを舉げることが可能である。しかしこれ等の

H

また資本主義の發展が如何にして必然的に技術上の發展の桎梏となるか、を資本主義の現狀からこれを明かにせん とレーニンとに従つて、資本主義の下に於ける技術が如何にして勞働階級に敵對的な存在として現はれるかを示し、 が資本主義の技術的腐朽をもたらすことを明白に示した。ζέπλλと述べてゐるが、現在のソヴェート理論はマルクス 發展段楷の特殊性たる技術發展に於ける諸矛盾と制限とを分析し、帝國主義時代に於ける資本主義的諸矛盾の發展 於ける技術發展の矛盾と制限との根底に横はれる生産の社會的性質と占有の私的形態との根本的矛盾を初めて暴露 グラノフスキーに從へば、「マルクスは資本主義が生産諸力の發展と生産諸關係との間の矛盾、資本主義の 下 **との發展の矛盾した階級的性質と制限とが如何に具體的な形態を取るかを示した。レーニンは資本主義の最高**

能力 グラノフスキー、資本主義の下における技術發展の諸矛盾。『資本論』研究、二二五頁

化のための手段として現はれる。そして労働搾取の手段としての機械は、多數の勞働者を部分勞働者たらしめ、化のための手段として現はれる。そして労働搾取の手段としての機械は、多數の勞働者を部分勞働者たらしめ、 即ち資本主義の下に於ける技術の發展は一つに利潤の原則に依つて支配せられて居り、且つそれは勞働搾取の强大即ち資本主義の下に於ける技術の發展は一つに利潤の原則に依つて支配せられて居り、且つそれは勞働搾取の强大 つて代る勞働の費用との差額が、平均利潤と市場に於ける成功的な競爭とを保證する場合に於いてゞある。」(註10) の増大を目的として居る。それ故に、新しい機械が資本主義の下で利用せられるのは、單に機械の費用とそれが取の増大を目的として居る。それ故に、新しい機械が資本主義の下で利用せられるのは、單に機械の費用とそれが取 「資本主義の下に於ける機械生産の目的は、生産諸力の發展ではなくして、餘剩價値と利潤の增加を、勞働の搾取

ソヴェート五ケ年計劃さその技術論

四九(三四九)

來は生産力を增大し、「人間の勞働に置き代つて、勞働を安易ならしめる偉大なる要具である所の機械」は、資本家來は生産力を增大し、「人間の勞働に置き代つて、勞働を安易ならしめる偉大なる要具である所の機械」は、資本家 に取つては勞働者支配の手段に轉化する。此處に機械の、資本主義的技術の階級的特徴づけの最も重要なる契機の 一つがある。(註二、 その奴隷たらしめる。そしてもはや勞働者に取つては『勞働の輕減すらも苦惱の源となる」。(マルクス)かくて本 働者から一切の知能的内容を収除き、勞働者を單なる機械的な存在にまで引下げ、勞働者を機械の附屬物たらしめ、

註一〇 描] | Ibid., p. 16. M. Rubinstein; Science, Technology and Economics under Capitalism and in the Soviet Union, 1932, p. 15.

『資本論』研究、11三〇頁。

zu ihrer Kulturbedeutung, 1932. 或は R. N.; Coudenhove-kalergi; Revolution durch Technik, 1932. の如きはこれであ またぞれ故に屢々技術と倫理の統一が要求せられたりしてゐる。 ッェルの如きはかくの如き事實を Hechnizismus なる言葉を以つて表明してM. Holzer; Technik und Kapitalismus, 1932.) 大體右の如き見解は、マルキストでない人々に依つても亦大體承認せられる所であつて、例へば、最近に於いてはホル (P. Krannhals; Der Weltsinn der Technik als Schlüssel

依つて、男子勞働を婦人勞働に依つて、成人の勞働を兒童の勞働に依つて驅逐することを可能ならしめる。 せらるゝ勞働者の範圍が擴大せられることは、失業豫備軍の增大、從つて益々多數の者を貧困の狀態に陷れる。そしせらるゝ勞働者の範圍が擴大せられることは、失業豫備軍の增大、從つて益々多數の者を貧困の狀態に陷れる。そし 資本主義の下に於ける機械の發展が益々勞働を外面的に容易化することは、やがて熟練勞働者を不熟練勞働者に かく搾取

販賣に依つて生活する幾百萬人の生存は益々不安なものとなる。」(註::) **剩の増大はヨリ急速となる。勞働の生産性が高ければそれだけ、他人の富を増加する目的のために、その勞働力の** 科學の進步が速かであり、生産過程の技術的變革がヨリ速かであるだけ、勞働者の雇傭からの釋放と相對的生産過 しかし乍ら、この不合理は爭ふべからざる生きた事實であり、それは資本家的生産の異常なる矛盾の一つである。 ゐる。「失業と貧困とが生産諸力の增大、進步と、科學と、技術の發達の結果であるとは不合理のやうに思はれる。 に取つては益々容易となる。ルービンシュタインは技術的發展の結果である失業問題に就いて次ぎの如くに述べて てこのことはまた現業勞働者の勞働諸條件を壓迫する所以となる。即ち勞働時間の延長と賃銀の切下げとが資本家

描] [] Rubinstein; op. cit., p. 17.

居ることは、資本主義的技術の發展の階級的性質を明瞭に示してゐるものである。唯三之 諸條件の惡化、資本家に對する勞働者の隷屬化と彼等の窮乏化、これ等の諸現象が現在驚くべき範圍にまで達して 義發展の現段楷の特殊性を明白に反映してゐると考へてゐる。即ち多數の勞働者の無資格化と失業者の增大、勞働 つて、擴大せられ强化せられて行く。グラノブスギーは、今日善々がフォード工場に於いて見るが如き、コンヴェ ヤ・システムの發達が、現在の世界恐慌の直前に於ける資本主義的合理化に多く役立つたことに依つて、資本主 資本主義の下に於ける技術發展の以上の如き諸特質は、機械が益、自動機械の體系にまで發達せしめられるに從

註一三 『資本論』研究 二四五頁。

ソヴェート近ケ年計論さその技術論

被)が作られ、またかくの如くにして生産が行はれる場合には、労働者の役割は機械體系の指導とその作業の統制とに跡 **勞働との對立を止揚する物質的技術的基礎が作り出される。」と。(圏點は藤林)** 頁を参考にせられ度し。 に過ぎないところの、舊來の分業を强めるが如き形態を採用する。」「資本論」研究、二四二頁)尚ほ同書二五〇—二五一 の附屬物として固定せしめ、勞働者は『工場の組織された專制と資本の軍隊的規律』<マルクス)とに從屬した部分勞働者 生産過程の連續と勞働期間の短縮とを確保するにあたつて、機械による勞働者の隷屬化を極度に强め、勞働者を益々機械 勞働と精神的勞働との對立の止揚をもたらすどころか、むしろ反對に、その最高の段階たる獨占資本主義の時代において、 動化は、資本主義の下ではその階級的性質に妨げられて實現されるに至らない。資本主義はその發展過程に於いて肉體的 らは容易に氣付かれない事實であらり。かくて彼はまた引き續き次ぎの如く述べてゐる。「しかしながら、かゝる程度の自 め、單なる肉體的勞働者に化し、そして機械的な存在にまで陷れたに對して、自動機械體系が-想起して見より ラノフスキーが自動機械に就いて尙ほ次ぎの如く述べてゐる點は吾々の注意に價する。即ち「かやうな機械 肉體的勞働と精神的勞働との對立を止揚する可能性を與へてゐると云ふ見解は、全く資本家的な視角か 單なる機械が勞働者を部分勞働者たらし 例へば讀者は輪轉機を く自動機

Ł

つて支配されてゐる。 支拂勞動に依つてい 資本主義の下に於ける一切の技術的改良と進步は、資本主義の最高の原則であるところの、 技術的進步が實現せられる。これに就いてマルクスは、 かくて資本主義の下に於いては、「技術的改良が代置する勞働の量ではなく、それが代置する 「と」にも亦資本主義的生産が特殊 資本の利潤追及に依

諸條件との矛盾の一表現である。」(註:五) の購買力の減少、 る一つの制限として作用する。更らにまた、技術的發展がもたらす相對的過剩人口、失業豫備軍の增大、從つて大衆 して、 の點に達するやこの發達と衝突するに至るものである。」ことを指摘してゐる。(圈點は筆者)(鮭」四)かくの如くに 限を有すること、且つ又、それは決して生産力と富の生産とを發達せしめる絶對的形態ではなく、むしろ或る一定 他力に於いてとれを抑壓する。かくの如き矛盾は「資本主義の特徴たる生産の無制限的擴大と資本價值增殖の 廣大な範圍に於いて技術的進步を壓迫する。 前述の如く勞働諸條件の惡化―賃銀の引下げと勞働時間の延長とは同じ結果を示す これが相對的過剰生産、 恐慌に導く。恐慌は確かに技術的進步に對する刺戟を持つものではある 資本主義の利潤の原則は一方に於いて技術的進步を促進せしめる が技術の進步に對す

註一四及び一五 『資本論』研究 二四七頁。

に一定の超過利潤を保證して居り、且つまた巨大な固定資本の大部分、 勿論、獨占の下に於いても、 する刺戟が消滅し、またそれに應じて、技術的進步を人為的に阻止するといふ經濟的可能性も生じてくる。」(註こさ れに應じて或る程度まで、技術的進步に對する、從つてまた他のあらゆる進步に對する、すなはち前進的運動に對 ・・・・・・不可避的に停滯および頹廢への傾向を生ずる。すなはち、 技術の發展に闘する資本主義のかくの如き矛盾は、 技術的改良は利潤を増大する可能性を與へはする。しかし獨占價格は資本に對して既 獨占資本主義の時代に入つて益々露骨に現はれる。「獨占は、 たゞ一時的にもせよ獨占價格が行はれると、そ 岩しくはその一部分の尚早なる道徳的磨滅

G・化學トラストは、その金庫の中に、生産に利用せられることを許されない數千の特許を保有してゐる。」(註二〇 と云はれて居る。 とに依つて同じくそれを自己の支配の下に置く。証しむかくて最大の資本主義トラストの一つであるいドイツの1 際化するに過ぎない。そしてまた他方に於いては、外部に於いて行はれた發明については、その特許を買收すると 的研究を行ふ實驗室や研究室を持ち、共處で行はれる一切の發明を秘密に附し、時に僅小の有利なる發明だけを實的研究を行ふ實驗室や研究室を持ち、共處で行はれる一切の發明を秘密に附し、時に僅小の有利なる發明だけを實 的可能性の出現に依る、固定資本の道德的磨滅、不變資本の價値消滅が最も太なる苦惱である。共處で資本主義的的可能性の出現に依る、固定資本の道德的磨滅、不變資本の價値消滅が最も太なる苦惱である。共處で資本主義的 をもたらすやうな技術的改良はその實現を阻止せられる。巨大な固定資本を有する資本家に取つては、新しい技術 あらゆる手段に訴へて、技術的進步を自己の掌中に支配しやうと試みる。一方に於いて獨占企業は、科學

証一六 レーニン、帝國主義(岩波文庫)一四三頁。

註一七 『資本論』研究 二五四—五頁。

註一八 Rubinstein, op. cit, p. 21.

その實際經濟上の應用との間のひらきは、獨占資本主義に依つて創られた諸條件の下に於いては特に大きくなる。」 裡に應用せられない。」(註)れ) 「獨占資本主義のこれ等の傾向は、生産諸力の發展を阻害することに依つて、 右の如き技術的進步に對する支配は、資本主義的獨占の不可避的政策の一部であり、從つて「近代技術の可能性と 莫大な量の科學的勞力と多年の熱心な努力とは浪費せられて、 しかし獨占資本の下に科學的研究が集中され、大規模の實驗室や研究所が 科學的天才と、技術的創意と、發明の **火して産業上に、現實の生活の**

れ乍ら、技術的進步は大いに制限せられてゐると云ふ矛盾が現れてゐる。 ると云はなければならぬ。其處で獨占資本の下に於いては、技術的進步の可能性がそれ自身の手に於いて創り出さ 行はれた發明に依存して居た以前の時代に比較すれば、技術の發展に對しては遙かに大なる可能性を示すものであ 共處で多數の科學者や技師が研究に從事することは、技術的進步が個人的發明家や大學の實驗室に於いて偶然

註一九 Rubinstein, op. cit., p. 2

技術家から其の就職の機會を奪ひ、彼等の科學的、技術的才能を浪費してゐるかを示してゐる。 倘ほルビンシュタインは右の書に於いて、現代の資本主義が事實如何に科學と技術の進步を阻害し、また多數の新しい

技術的改善を促す諸原因を有するものではあるが、「獨占資本主義に固有な、 格が一方では舊來の集積水準と、 般にそれに應ずる技術的改良の可能を創り出し、トラストとカルテルは、旣に廣大なる規模の統一的技術の可能と、 また資本の集積と集中とは自ら技術的進步に對する可能性を提供するものである。即ち、生産の規模の擴大は一また資本の集積と集中とは自ら技術的進步に對する可能性を提供するものである。即ち、生産の規模の擴大は一 生産増大の阻止、 それに應じた舊生産水準との範圍内において一定水準の利潤を保證し、他方では 生産規模の縮小、集積過程の衰微、從つてまた進步的技術の使用に對する阻止へ 特殊な障害の一つは、・・・・・獨占價

·註二〇 『資本論』研究、二六四頁。

質からこれを論證しやうと試みである。

くこれに關しては讀者は同書二六六頁以後を參照せられ度し。
 更らにグラノフスキーは、生産の不均等な發展に關して技術的進步の資本主義的形態を論し、最近の資本主義諸國の現

ソヴェート五ケ年計畫さその技術論

五五 (三五五)

られることは、此處に定めて詳言するまでもないことである。 界の到る處に於いて、「資本家達は意識的に技術の一層の發展を妨壓し始めてゐる。」(註三)資本主義的技術發展の界の到る處に於いて、「資本家達は意識的に技術の一層の發展を妨壓し始めてゐる。」(註三)資本主義的技術發展の かくの如く矛盾に充てる姿態が、 にその發展を抑制し、自然に對する人間社會の支配が擴大するのを阻止してゐる。」(註三)(傍點は筆者)が旣に世にその發展を抑制し、自然に對する人間社會の支配が擴大するのを阻止してゐる。」(註三)(傍點は筆者)が旣に世 大工業とに基いて技術を急速に發達すると共に、他方の手ではそもそもその勃興の時代から、もう意識的無意識的 現在の世界恐慌過程の裡で種々な方面に矛盾を暴露してゐる。「資本主義は一方の手では生産力を發展させ、機械と 以上の如くにして資本主義の下に於ける技術の發展は、それ自身が創り出した世界市場の、今や狭隘化のために、 生産力の發展と資本主義的生産關係の矛盾と云ふマルクスの一般的見解に包括せ

註二一 N. Bucharin; Der Kampf zweier Welten und die Aufgabe der Wissenschaft, 1931, S. ルピンシュテイン 生産力に関するマルクスの學説 『資本論』研究 三七六頁。

六

この點が私の本論に於ける問題の中心である。 及び社會的發展の物質的基礎としての様相、これ等がソヴェート技術理論に於いて如何に考へられてゐるか。 概略上述の如く解せられてゐる資本主義的技術に對して、 ソヴェートに於ける技術の意義、その發展の可能性、 正に

的建造、經濟生活の組織的統制、文化的、科學的、及び技術的發展の計畫的指導に應用せられたる最初の實驗であ ト同盟は人類の歴史に於いて、 この(マルタス主義的)科學的分析と科學的方法とが社會的諸關係の意識

であり、 る技術の發展の、そしてまたその技術理論の出發點である。 産關係の、科學と技術と生活の三位一體的發展の無限の可能性の確認である。そしてこれがまたソヴェー それは正に、「理論と實踐との、 云はド進步一般を抑制する資本家的社會の發展と衰頽の必然的法則からまぬがれてゐる、ソヴェートの生 ト同盟の存在そのものとその全發展は、かくて、真正なる科學的理論に結びつけられてゐる。」(註三三) 何よりも先づ自然科學と技術と物質的勞働との新しい結合の可能性」(註三)の認識

描[][]] Rubinstein, op. cit, p. 34-35.

超门图 Bucharin, a. a. O., S. 24.

そのものである。そしてこれとそ一切の技術的進步の直接の規準である。旣にかくの如き技術的進步に對する社會 推測し得る。かくてブタエフに従へば、 間勞働の量ではなくて、支排勞働の量であるのに對して、社會主義的生産關係の下に於いては、それは人間の勞働 に對する影響の、資本主義的技術のそれとは全く異質的なものであることと、技術的發展の無制限なる可能性とを 主義的原則から、 資本主義の下に於ける技術の發展が常に利潤の原則に固く結びつけられて居り、技術的改良が置き代るものは人 容易に、社會主義的技術が直接勤勞階級に對する、從つて人間に對する關係、彼等の全人格發展

主義的技術の根本的發展方向が、勞働者×××××××、勞働緊張の度を加へ、剩余價値をより多く絞り出し、 「肚會主義的技術の發展過程は、資本主義の條件の下における技術の發達過程と正反對である。・・・・・

ソヴェート五ケ年計劃さその技術論

度に輕減する方向に進んでゐる。」(註言) 得し支配する目的を以つて、社會主義的勞働にとつて必要な最高度の資格を保證することによつて、勞働を最大限 下で正常的な勞働の緊張を保證し、人間にとつて正常的な勞働能力の持續期間を保證し、勞働要具や生產技術を修下で正常的な勞働の緊張を保證し、人間にとつて正常的な勞働能力の持續期間を保證し、勞働要具や生產技術を修 縮めることになる。これに反して、社會主義的技術の發展方向は勞働日を短縮し、高度の、 する。從つてこの發展方向は、勞働者の退化や墮落および狂暴を最大限に促進し、彼等××××半分か三分の一に 勞働者を啞の附屬物と化することによつて、勞働者の熟練をより多く奪ひ去るといふ方向に進んでゐることを意味 だが社會主義の條件の

かくてル 註二五 ビンシュタインは、「社會主義のもとにおいてのみ、機械の作用は『その本來の姿』を現はす」(註三)と述 カ・ブタエフ 社會的勞働の性質に關するマルクスの學說 『資本論』研究 第二輯 (改訂版) 二七二頁。

註二六 『資本論』研究 三九二頁。

する眞實の意識的な命令者となるであらう。そして人間が自分自身の社會的諸關係の主人となる程度に應じて、自する眞實の意識的な命令者となるであらう。そして人間が自分自身の社會的諸關係の主人となる程度に應じて、自 で人類を支配してゐたところの生存の諸條件は、今や人間の權力と統制の下に歸し、 産は廢除される。そしてそれと同時に、生産者に對する生産物の支配も亦廢除される。社會的生産の無政府は、豫 め考へ抜かれた計畵に基く社會的生産の組織化によつて取つて代られる・・・・・・人類を圍儲して居り、且つ今日まめ考へ抜かれた計畵に基く社會的生産の組織化によつて取つて代られる・・・・・・人類を圍儲して居り、且つ今日ま 云ふまでもなく、エンゲルス(反デューリング)の云ふが如く、「生産手段が社會的所有に移行すると共に、商品生 茲に人間は始めて、

義の下に於いて可能となる人間の意識的な自然支配の過程の裡に、技術が人間をではなくて、 と云ふのはかくの如くしてゞある。 生活の發展のために、自分自身の自由なる發展のために利用するに至る。機械の作用が共處で『本來の姿』を現はす に人間の應用し得るものとなり、かくて彼等の支配に從屬するに至るであらう。」(鮭=も)と考へられてゐる。社會主 ろの人間自身の社會的活動の諸法則や、又人間を支配してゐるところの自然の諸法則は、茲に至つて完全に意識的 然に對する命令者たる地位も益い高まつてゆくのである。今日まで近づき難いものとして人間に對立して來たとて 人間が技術を人間の

義獨特の條件のため、資本主義によりては實現され得なかつた何干といふ機械が、生産に引入れられ、かくして、資本 産性は、それが人間の勞働力に代置する程度に應じて變化し、旣に發明されてゐながらも、『利廻り』といふ資本主 主義が意識的又は本能的に阻止してゐた無數の新發明や建設的事業や改良に對して刺戟を與へるのである。」(註三九) はつて居り、然かも其處ではもはや「偶然的な市場の景況に左右されることなく、恐慌の動揺も受けることもなく」、 **ず増大してゆく人間の慾望に應じて生産は益、擴大せられて行く。そして此處に技術發展の廣大なる可能性が横た** C非いの従って技術の發展は中断せられることなく推し進められる。かくて「社會主義的生産においては、 また社會的諸關係と自然に對する計畵的な科學的な人間支配が可能となる、社會主義制度の下に於いては、絕え 註二八 『資本論』研究 註二七 クルジャノフスキー 社會主義と技術の進步に関するマルクスの學説『資本論』研究「二二一一二頁から引用。

註二九 同書 三九一頁。

年計畵の下に如何にその發展が規定せられてゐるか。また其處で技術の發展に關する現實の諸事質は、 の技術理論の内に如何に反映するか。以下概略これ等の點を明かにしたいと思ふ。 熟せる技術的變革力を解放する。」(駐三O)然らば現在ソヴェートの産業技術は、それが社會主義的技術として、五ケ せずしてそれを増進する。社會主義は技術を資本主義的桎梏から解放し、かくて資本主義的生産諮關係中に旣に成 「資本主義は今や技術の發展を停止して居り、決してそれを前進せしめない。社會主義は技術發展のテンポを低下 ソヴェー

描川〇 N. Bucharin; Die Sozialistische Rekonstruktion und der Kampf um die Technik, 1931, S. 12.

+:

次ぎの如き訓令を與へてゐる。 既に一九一八年四月六日に、 レーニンは科學アカデミーに對して、「科學的、技術的勞働の一計畫の腹案」として

業の再組織と吾國の經濟的發展の一計畵を出來る丈け速かに完成せんがために、一連の専門委員會を構成すべきで 「自然の生産諸力の探及と研究を旣に開始してゐる科學アカデミーは、最高國民經濟會議から速刻指令を受け、產

この計画中に含まるべき事柄は次ぎの諸點である。

原料に接近するといふ、また原料の加工から半製品の加工の連續的な總での段楷に、完成品の獲得までに移るに

の最も重要なる原料品種と諸工業とを獨立に準備する可能性を最高度に保證すること。 當つて、勞働の喪失を最も僅小ならしめるといふ視角から、吾國に工業を合理的に分布すること。 現在の(ウクライナとドイツ人に依つて占領せられてゐる諸地方を除く)ロシャ・ソヴェート共和國に對して、總て 近代的巨大工業と就中トラストの見地から、 小數の巨大經營に生産を合理的に結合し、集中すること。

特に、工業と運輸の電化並に農業上の電力利用に注意を排ふこと。

を最小にすること。 電氣エネルギーの獲得のためには、安價なる燃料(泥炭、劣等炭)を利用し、且つ燃料の採掘と輸送に對する費用

・水力と風力機とを一般に、また農業上にそれを利用すること。」(鮭三)

描川 G. M. Krshishanowski; Die Grundlagen des technisch-ökonomischen Rekonstruktionsplans der Sowjetunion, 1932, S. 15-6.

及び「國營農場を發達せしめること」の必要は、完全なる社會主義社會の建設のために、 「農民の間に大衆の協同を發展せしめ、彼等の收獲を增大し、個人的農民經營を漸次社會的經營に合同する こと」、 書に比較して、農業問題が重要視せられてゐないやうであるが、尙ほ「勞働階級と農民との結合を强化すること」、 した現在の五ヶ年計畵の中心課題が明瞭に認められてゐることを見逃してはならない。勿論、其處には、五ケ年計 右のレーニンの腹案の内に、吾々は旣にその後の全國電化計畫委員會(ゴエルロ)の計畫の、更らにそれから發展 レーニンのまた重要したる

シエート 近ケ年計畫さその技術論

術的にも經濟的にも、 に全國の電化問題と關係せしめられてゐる。そして意局全國電化の技術的基礎の上に、 と農業とを、また農業をも最新技術の基礎の上に建設するといふことは、ソヴュートに 他の最新式農業諸機械の自國内に於ける大量生産の可能と、農村の技術的發展の中心であるMTS(機械•トラクダ は國經農場、 も新しい技術的基礎の上に、現代の大規模生産の技術的基礎の上に、移すことが必要とせられた。(註言)そしてそれ 於いては重工業、 たらしめることを中心課題とした。そして「工業の急速なる發展、第一に生産手段の生産の急速なる發展なくして ところである。(誰言)既にレーニンのかくの如き所見に基いて、五ケ年計畫はソヴェートをして先く獨立の工業國 は既に從來の中央並に南部の諸地方から東方地方へ、ウラル並にシベリヤへ移されつゝある。そして最後に工業 ーコンの指摘したる所に従つて、 配給所)の多數の建設に依つて、 特に急速なる集團農場の發展に依つて、且つその技術的基礎としてはトラクター、コンパイン、其の トの經濟生活を新技術的基礎の上に變革することは不可能である。」(註三)かくで第一次五ケ年計畵に 特に諸機械製造工業の發展が著しく遂行せられたのは當然である。がしかしそれと共に、農業を 最進資本主義國を追越さらど企圖せられてゐる。 工業の、一般的には生産力の全國的合理的分布である。このために工業の中心 質現せられつゝある。更らに五ケ年計畫の下に於いて特徴的なるものは、夙 有ゆる産業部門を通じて技 於いては、直接にまた間接 K

世三二 J. Stalin; On Technology, 1932, p. 14-5.

盐川四 Ibid., p. 16.

までもなく、それは社會主義的社會に必要なる巨大なる生産力に依つて條件づけられてゐる。 計畵として條件づけられてゐる。即ち、第一に五ケ年計畵の遂行それ自體は階級鬪爭の過程である。 右の如き五ケ年計畫の技術上の課題は、 ソヴァ トの從來の歷史的諮關係の内に於ける社會主義的建設のため 第二に、 云ふ

に必要な一切の技術的並に經濟的前提を國内に充實するにある。」(註三) 舊の可能性を、 れた小農業を、 る)のみならず、社會主義を基礎とする運輸業並に農業の再武製と改造に適應する工業を、 確立するにある。」 スターリンは尙ほ引續き次ぎの如く述べてゐる。「産業へ工業と譯すべきではないかと考へられ (工業?)獨立國となす」にあり、他方國内的にも亦「更にソ聯を工業國となすに當り、徹底的に資本主義分子を掃蕩 換言すれば資本主義諸國の我儘に依存する無力の農業國ソ聯を變じて、世界資本主義の恣意より脫した强力な産業 して、社會主義的經濟組織の戰線を擴大し、ソ聯內の階級を一掃して、社會主義社會を建設する爲め、經濟的基礎を へば、一世運に遅れ、 五ケ年計劃に依る階級闘爭過程は、一方資本主義諮園からの干渉をまぬがれることであり、 清算するにある。凡ゆる計畵的外國の武力干渉を排撃し得る國防力を、最大限度に擴充する爲め之 大規模の集團農業の軌道に移し、農村に於ける經濟的基礎を保證し、斯くしてソ聯內の資本主義復 時には中世紀時代の技術國であつた我國を、現代的新技術の軌道に轉換せしむるにあるもので、 我國内に確立し、 正にスターリンに從 細分さ

註三五 またスターリンは次ぎの如ぐ再び力説してゐる。即ちっソヴェー ト五ケ年計劃にその技術論 ト政権は、 時代遅れの工業を基礎に、 永く存績す

六三 つ三大三つ

馳する二分野を根據に、存續することを許さない。小農業が大集團農業に合流されざる限り、ソ聯に於ける資本主義復活 の危險は、最も現實的のものである。」と。ヘソヴェート聯邦事情 ソヴェート政権は、資本主義分子を排撃する社會主義大工業と、資本主義分子を産む個人的小農業の背 ト政権の信頼すべき眞の基礎となるものは、將來に於て資本主義諸國の工業を、 第四卷 第三號 二二—二頁 凌駕する現代

konstruktion, S. 13ン しかし彼は此處で自然の要素を多少重視し過ぎてゐるやうである。 <三)技術=的經濟的發展の現段楷(四)その資本主義的環境に對する相互の關係(等々、(Bucharin, Die sozialistische Re 係の一般とを考慮しなければならぬとして、次ぎの諸點を擧げてゐる。即ち、〇〇國の富源(〇〇その技術的水準一般 **尙ほブハリンは、ソヴェートの社會主義的技術の發展を了解せんがためには、その全發展の自然の出發點と歷史的諮閱**

要である。更らに工業生産力の増大と比例して農業生産力の増大が必要である こと は經濟的發展の前提であり、 (鮭三つ)それはまた社會主義的計畫經濟に於ける生産の均衡化として現はれる。 本主義復活の根を切り採ることであるが、それはまた農業生産力増大のための科學化、最新式の技術化のために重 細分されてゐる小農經營を大規模農業に結合するといふことは、旣に右に見たるが如くにして、農村に於ける資

註三六 農業集團化の問題は、當面の問題としては、第一にソヴェート經濟建設過程に於いて原料と食料品の生産を保證す ることであり、また間接には資本主義諸國から獨立してゐるソヴェートに取つては農産物の輸出に依りて軍要な意義を持 参加者たらしめる、物質的基礎の確立である。がしかしこれ等は過渡期の問題であつて、根本的にはそれは矢張り全國民 つてゐる。そしてそれは革命以後ソヴェートの苦惱の種であつた農民を急速に、勞働階級と共に社會主義的建設の積極的 の経済的發展、彼等の社會的文化的生活水準の高揚の物質的基礎であると見なければならね。

現はれてゐるやうに、勞働生産力の最も合理的な發展への傾向を示してゐる。 に闘する社會主義的原則を明かに反映するものであると云はねばならない。即ちそれはレーニンの提言にも明白に であるが、それは技術發展の問題から見て、資本主義的生産の無政府狀態の場合とは全く反對に、前述の技術發展 全國に渡る生産力の合理的分布も亦、右の註言さに述べたると同じ過渡期的問題の解決に重要な影響を持つもの

た敷字通り、解決せられたとしても、ソヴェートの技術的發展は右の見地から見て未だ單なる第一步を踏み出した 要であつた。」(誰)むとせられたのである。そしてされが第一次五ケ年計畫に依つて、假令ソヴェート當局の發表し あつだソヴェートの現狀と相對的に、「先づ機械製造を中心とする重工業より五ケ年計畫の實現を開始することが必 られ來なければならぬことは明かである。唯だ何人も認めるやうに、世運に遅れ、時には中世紀時代の技術國」で つからである。そしてソヴェートの産業技術の發展は、それが社會主義的技術として、根本的には此處から規定せ に獨立のものではあり得ない。蓋し一切の問題は全國民の經濟的物質的生活の水準の如何がこれに重大な影響を持 と同時に社會主義的建設の本道に沿つて前進しなければならぬ。勿論、この二つの問題は、後に論ずるが如く、互 五ケ年計畵は、その歴史的社會的諸關係の裡に、階級闘爭過程としての一切の過渡期問題の解決を必要とする、

会観の想象がらうとうとはマダ

技術の觀點から、アハリンはソヴェートの發展を次ぎの三つの楷階に區別してゐる。

(一) 帝政時代のブルチョア的、領主的經濟に對して特徴的であつた舊技術的基礎が依然存して居る時代(歴史的

(二)近代的資本主義技術の利用の時代(技術的裝備の輸入)

める時代) (三)社會主義がそれ自身の技術的基礎に於いて發展し始める時代(狹義の社會主義的技術の新しい型が創られ始

吾々は此處にソヴュート技術の最も顯著なる社會主義的特質を求めねばならない。 ン以後ソヴェートの技術的變革の基礎として電化問題が重要視せられてゐることは既に周知の事實である。そして 主義の技術は電力に依つて、全經濟の總での方面に渡る徹底的な電化に依つて、特徴づけられると。証言の 勿論、現在のソヴェートにはこの三時代の特質が依然として存して居るのがあるが、尚ほ彼は次ぎの如くソヴェ ート技術の發展を特徴づける。即ち、封建時代の技術は水車に依つて、資本主義の技術は蒸氣機關に依つて、社會

超三八 Bucharin; Die sozialistische Rekonstruktion, S. 13-4.

る。これに對して經濟的支配の集中化せられたる形態の基礎は集中化せられた勞働手段にある。そして經濟生活の 統一的支配と勞働手段の統一的體系の基礎は技術の統一的基礎であり、換言すれば、社會の全経済的方面を充して イワノフの旣に指摘した所に從へば、經濟生活の無政府的支配は勞働手段の四分五裂の狀態に基礎づけられてゐ

に就いて次ぎの如く述べてゐる。 的並に質的前進運動の急速なるテンポが徹底的な電化の基礎に於いて保證せられると做し、ソヴェートの電化問題 を有する一工場を出現せしめてゐるとすれば、共産主義は、作業機の組織體系でその全地域を包括する傳導機構に依 イワノフのかくの如き見解に従つて、クルシシャノフスキーは技術及び經濟の社會主義的統一に依つて、生産の量 りて、集中化せられたる自動機の一體系がらエネルギーを供給せられる一地方、一州、全國家を出現せしめる。(駐三九) としての電化である。資本主義が、一つの中心の自動機から傳導機構に依つて動かされてゐる作業機の組織的體系 働手段の統一的形態は諸地方、諸州及び諸國家を結ぶ、それは正に全世界を包括すべき、經濟の統一的技術的基礎 ゐる一つの統一的機械である。そしてエネルギー經濟の最近の發展に依る技術的可能に從つて、これを觀れば、勞

「出來る丈け合理的なエネルギー經濟的計算の視角の下に産業諸部分を結合するとと。 電力に基いて工業を近代化すること。 統一的電力網に依つて結びつけられてゐる單獨のエネルギー經濟諸地域に全國を分割すること。

一廣汎なる電化に基いて運輸業を再建すること。 トラクダー化と同時に進歩せる電化に依つて農業を技術的=經濟的に再建すること。最後に、

經濟的再建が更らにそれに沿つて前進しなければならない道筋である。」(註BO) 社會主義的建設の實現に際して、吾がエネルギー源泉の最大の節約の條件下に、ソヴェートの技術的=

ソヴェート五ケ年計畫こその技術論

扭三九 G. M. Krshishanowski; Gie Grundlagen der technisch-ökonomischen Rekonstruktionsplans der Sowjetunion, 學等等等軍軍軍軍事 1932,

描四〇 a. a. O., S. 38.

節約を可能にする。更らに最も合理的な燃料の利用が熱電氣中心制度に依つて實現せられる。これ等の電力及び熱 利用せられ得る。また電力生産地に於ける過剩電力の適當なる處置に依つて、最大負荷力を引き下げ、且つ能力の と劣等燃料が其の資源地に於いて利用せられる。其他電氣、熱及び機械的エネルギーの一切の資源が最も合理的に **うに最高の技術的合理性の實現の可能が確認せられてゐる。即ち、單一的高壓電力網の創設に依つて諸地方の水源** 拘らず、ソヴェートの社會主義的計勘經濟はその質現を試みつくある。そして共處ではレーニンが旣に指摘したや れたかくの如き電化の可能性が、後に見るが如く資本家的生産の故に其處では未だ徹底的に質現せられ得ないにも 大陸全體の規模における單一の高壓電線網の創設を强く要求してゐる。」(鮭))(旣に資本主義諸國に於いて與へら ネルギーの生産に對して、その分配と消費の方面からも單一的電力經濟が要求される。(註四二) 「現代の電氣技術の發展水準は、技術的統一の創設、單一的動力經濟への全原動機の統一、及び數ケ國全體、數ケ

註四一『資本論』研究、二八〇頁。

註四二 『資本論』研究、二八一十二頁。

経済はっ一般的に國民経済上の電力の生産い 統一的電化問題の右の如き利益にも拘らず、資本主義の下に於いてはそれは實現不可能である。單一の計畵的電統一的電化問題の右の如き利益にも拘らず、資本主義の下に於いてはそれは實現不可能である。單一の計畵的電 分配及び消費を計畫的に統制すると とを意味する。こっそ してそれは

資本の道德的磨滅を引き起す。また國際的電化問題は現在の帝國主義諸國家間に於いてはその實現の可能は全然存 和解すべからざる矛眉、これ等凡ては一體となつて、 しない。要之、「私的資本主義的所有の限界、個々の國の內部における資本家諸集團の闘爭、各國の資本家諸集團の 實際上、個々の資本家的企業の經濟的獨立性を一掃することに外ならぬ」からであり、また獨占資本の下では一部 資本主義の諸條件の下における單一的電力經濟の實現を不可

註四三 『資本論』研究 二八二頁。

との問題ではなく、社會主義的計畫に於いてはこれを貫行せなければならない問題であると考へられてゐる。 計畫の實現は未だ相當の歲月の後であらう。それは兎も角かくの如き統一的技術的基礎の實現は、もはや可能と否 既に重要な發展を示してはゐるが、その理想とせられるが如き、全經濟部面と關聯し、且つ廣大な地域を含む電化 1ト國家電化計畫は現在、地方の水力發電所の建設と工業の分布計畫に基く新工業地域との結合に於いて、

力

要である。即ち一般的には、「存在が意識を決定する。」「自然との闘争過程に於いて、人間は自然の面貌を一變せし マルクス主義の科學的分析に依つて、人的技術の理論と實践が結びつけられてゐることはいふまでもない。かくて 以上物的技術に闘するソヴュート理論を見たのであるが、共處に於けると同様に、人的技術の方面に於いても亦 吾々は先づソヴ。1トの人的技術の問題を取り扱ふにあつて、マルクスの次ぎの如き見解を記憶して置くことが必

ソヴェート五ケ年計画さその技術論

六九 (三六九)

CC CH HO

特徴づけとがとれである。(鮭四) の胎内から生れ出たばかりのものであるから、經濟的方面たると、道德的、知的方面たるとを間はず、一切の方面の胎内から生れ出たばかりのものであるから、經濟的方面たると、道德的、知的方面たるとを間はず、一切の方面 に於いて自己が先頃まで宿つてゐた古い社會の母斑を背負はされてゐる」といる過渡期的社會に關するマルースの める許りでなく自分自身の面貌をも一變する。」と云ふ史的唯物論の根本的見解と、特にまた「やつと資本主義社會

註四四 『資本論』研究 一六七頁及び三九〇頁より引用。

發展を目指す人的技術の存在の意義が認められる。 (語画) 度は、既にその社會主義的生産關係の裡に、根本的には質的變化の可能性が與べられて居り、尙ほ將來その生産力 の發展と共に全國民の意識的生活の質的變化が完成せられて行くと考へられる。そして此處に真に自由なる人格的 右の史的唯物の見解から、吾々は容易にソヴェート勤勞階級の知的、道德的性質、一般に彼等の人格的發展の程

註四五 私は嘗つてソヴェートの人的技術の蘐展とその現狀とに關して一部の事情を紹介したことがある。それ故に此處で は既に私の紹介した所を繰返す必要はない。讀者は左記の拍論を參考せられたし。

精神技術學の危機―ソヴェート・ロシャに於ける精神技術學に就いて、《本誌第二十六卷》第十號》

するかの Energetik をも考慮したけれげならぬ。」但し此處に人間の精神的エネルギーを物的エネルギーと同樣に、 語る場合には、 ルシシャノフスキーは讀者に對して次ぎの如く注意を促してゐる。「吾々が工業化のエネルギーの基礎に就いて 吾々は物的自然的エネルギーに關聯する重要なる部分と共に、また勤勞者自身の生きたる力に關聯

於いては搾取に基く社會的勞働過程の諸條件の下に科學的認識をしばりつけてゐた鎖は取りはづされ、科學は益い 目的意識的な社會主義的建設計畫の方向に從ひいこの建設の發展は、同時に肉體的勞働と精神的勞働との間隙を益し 加の增大いこれ等は總て人間の關係を物の關係に變化した從前の生產關係を顚頭する。かくてまた資本主義の下に る生産勞働、對抗計畵、大衆の指導、勞働者の發明並に技術的改良案、そして最後に管理組織に對する勞働者の參 れは結局都市と農村に於ける勤勞者を社會主義的競爭に引入れる。勞働時間の短縮を伴ふ交替勞働、中斷せられざれは結局都市と農村に於ける勤勞者を社會主義的競爭に引入れる。勞働時間の短縮を伴ふ交替勞働、中斷せられざ 己批判と社會主義的競爭は全くの新地を開拓する。吾々の眼前には完全に新しい勞働組織形態が成立して居り、そ 發見せんとする努力を可能にしてゐる。即ちソヴ"ートに於いては勞働の組織は勞働者自身の仕事となつて居り、自 力の存在は「積極的量的變化の總計が旣に勞働の新しい質を生ぜしめるが如き、生きた勞働の組織化の新形態」を 物的な存在物と考へられ、完全に資本の支配に從屬せしめられてゐる。かくの如き狀態と對照して、ソヴェート權 て更らに彼の云ふ所に從へば、資本主義の下に於いては勞働者は生産の主體ではなくして客體であり、彼等は單に 定價を考へなければならならぬ。そしてそれはソヴェート權力の持續に依つて條件づけられてゐる。」といふ。そし 濟的計畫の見地から生きた勞働の Energetik に就いて語る場合には、吾々は先づこの生きた Energetik の特有の測 ーに依つて測定せんとすることは明かに機械論的誤謬に陷るものであるとなし、彼は「吾々が吾國の國民經

描图小 Krshishanowski, a. a. O., S. 8-11.

ソヴェート五ケ年計畫こその技術論

じてソヴェ と一般に勞働生産力の增進に異常に役立つてゐることは云ふまでもない。勤勞階級はその社會主義的勞働態度を通 に科學の促進のために勤勞階級の演する役割は益、擴大しつ」ある。(註mと) かくの如き勞働態度が物的技術の發展 遂行に從事する許りではなく、經營管理の仕事に参加する。また他方に於いては新しい技術的進步のために、更ら の参加者は勞働を以つて名譽の仕事であり、彼等は英雄的事業に参加しつゝあるといふ意識の下に、計畵の熱心な ートに於ける社會主義的建設の極積的な参加者となりつくある。 トの社會主義的生産關係の裡に勤勞階級の勞働態度は變化しつゝある。即ち社會主義的競爭

註四七 Rubinstein; Science, Technology and Economics under Capitalism and in the Soviet Union, p. 38 ff. 勞働者の技術並に科學の促進に關する積極的參加の狀態に關しては、次ぎの書を參考とせられ度し。

はならない。人的技術の重心が教育に置かれるのは正にこの故である。 的技術の中心問題は過去の資本主義的母斑を勤勞階級の多數のものゝ知的、道德的性質から拭ひ去ることでなけれ て云ふまでもなくソヴェートの現狀は五ケ年計畵下に於いて尙ほ多くの過渡期的特徴を持つものであり、從つて人 の勞働者と農民の間に擴大しやうとする意識的な努力を負擔するものがソヴェートの人的技術である。Citerも)そし 右の如き社會主義的建設の積極的参加者としての勞働態度の現實の可能性に從つて、 かくの如き態度を盆・

顔じ得ない。 此處に資本主義的人的技術とソゲェー 本家的イデオロギ 勿論資本主義的人的技術は外形的にはソヴェートのそれと同様に、資本主義的生産の增進發展のために勞働者を資 ーの影響下に置かうとする。しかし其處では勞働者は資本家的生産の故に眞に生産の指導者たる役割を のそれとの間の異質的な相違が存在する。尚ほこの話に関しては前

掲へ註四五つの損稿を参考とせられ度し。

いふ問題に、從つて技術的敎育に强く關聯する。しかし乍ら、勞働者に對する單なる技術的敎育は未だ問題の解決 弟の間に主として向けられてゐることを了解し得る。そして此處に正に、物的技術に於いて吾々が旣に見たやうに、 反面は資本主義的分子に對する闘争を意味する。此處から吾々はまた容易に、ソヴェートの教育政策が勞働者の子 てその技術的教育は本質上矢張り社會主義的建設の意識的積極的参加者の教育であり、そしてこの積極的な意義の に觸れて居らぬ。蓋し勞働者の技術的教育と共に新しい勞働態度の養成が解決されなければないからである。かく むしろヨリ積極的に、五ケ年計畫の階級闘爭の意義を充たす人的技術の存在を看取し得る。 しかしソヴェートの當面の問題としては、その人的技術はその急激なる物的技術の發展に應じて、技術の體得と

右の事情はスクーリンの次ぎの諸言の中に吾々の明かに認め得る所である。即ち、

「重工業を發展せしめるといふ課題は單に資本蓄積のため許りではなく、技術基幹部員の問題ともなる。即ち問題

(二)勞働階級の間から新しい赤色技術と専門家を訓練すること、である。」 (一)社會主義的建設事業に於いてソヴェート制度に忠實なる數萬人の技師と専門家を得ること。

「人事に闘する問題は今や眞に生死の問題となつてゐる。その解決は次ぎの諸點にある。

ソヴェート五ヶ年計畫さその技術論

(一)技術上の破壊者に對する決然たる関争と

(二)破壞者に組みしない多數の技術家に對する最大量の配慮。

(三)外國からの技術的援助の組織化學

(四)吾國の事業家を外國に派遣して技術上の經驗を研究し獲得せしむるとと

(五)勞働階級の間から多數の技術家を出來る丈け速かに訓練せんがために、技術的敎育諮機關を適當なる經濟機

註四九 Stalin; On Fechnology, p. 43, and p. 45-46.

までもなく被教育者の將來の自由なる知的並に技能的發展を制限しないことを目的とするものであつて、自由なる せられた技術的教育ではなくして、多藝的。Polytechnisch、な教育が重視せられて居ることである。このことは云ふ 人格的發展を目指すととろの人的技術の目的に相應するものである。 更らに次ぎの一事を指摘して置かう。ソヴュートの勞働者に對する技術的教育は、知能的に、また技能的に局限

渡別的な問題としては現在成人勞働者に對する文盲撲滅策がまたソヴェ 提とするととは云ふまでもない。この意味に於いて新して就學年齡に入つた兒童のための小學校教育の擴大(學校 最後に吾々はソヴェートの文盲撲滅政策に簡單に觸れて置から。何んらかの形の技術的教育が一般普通教育を前最後に吾々はソヴェートの文盲撲滅政策に簡單に觸れて置から。何んらかの形の技術的教育が一般普通教育を前 四年間から七ケ年間への義務教育制度の擴大)が重要視せられて居ることは勿論であるが、過 トに於いては重要な意義を持つてゐる。

に置かれてゐることが、資本主義諸國の學校制度に優るものである。 られてゐるといる點である。(誰五)。倘は一般に中等以上の技術教育がまた同様にして實際の生產過程と不雕の狀態 のための基礎工作を持つてゐるといふ點であり、且つそれは抽象的なものではなくて工場の實際と密接に結びつけ の文化問題は技術的文化の問題であると云つて居るが如く言語の)見童に對する普通教育が旣に將來の技術的教育 普通教育の一般的意義は此處に論するまでもない。唯だソヴェートに特徴的な點を云へば、ブペリンがソヴェー

超角〇 Bucharin : Die sozialistische Rekonstruktion, S. 19.

註五十、資本主義諸國に於いて箥達してゐる、ケルシェンシュタイナー以來の勞作教育 Arbeitsschuleが、既に抽象的であると いふ批評と劉照して、ソヴェートの小學校に於ける技術的準備教育がまた風味あるものでなければならぬ。

共に一九三〇年の半は過ぎて話られたものであつた。 三一年にかけて技術的教育機關の擴大の著しいことである。(註三) ―私が先きに引用したスターリンの言葉も質は が有ゆる機會に傳べられてゐるにも拘らず、それがまだ勤勞階級圣體を通じて觀れば重要な割合を占めて否ないこ は技術的破壞者の出現に驚されたのであつたけれども、他の一面に於いては勞働者間の社會主義的勞働態度の發展 練勞働者の欠乏、技術基幹部員の不足として問題にせられては居るが、一部はスターリンの旣に云ふが如く、それ 術教育の問題が特に痛切に緊急の問題とせられたのは、五ケ年計畫も旣に伴ばを過ぎた頃である。事實一九三〇 ソヴ*ートに於ける人的技術の發展はソヴ*ート政權の確立と共に始まつたのではあるが、その勞働者に對する技 **-そしてそれは急速なる物的技術の發展テンポに應じて熟**

ト五ケ年計畵さるの技術論

七五. ○三七五)

との證據であらうと考へられる。これ等の批評的な觀察に就いては節を新にして論じやう。 七六

| 註五二||ソヴェートの人的技術の發展に就いては前掲<

註四五)の抽稿を、また技術的教育機關の發展に就いては前掲<

註1) の拙稿を参考にせられたし。

0

ソヴェートの生産に於いては機械が未だその人を得てゐない、劣等品及び傷物の生産割合が甚だ大である、といふ が如き狀態はソヴェート當局者も正直にこれを認めねばならなかつた。その原因の一半は確かに勤勞者の能力の劣 等(技術的訓練と教育の不足)に歸せられる。 ば製品の品質の向上、生産費の低下、計畵の嚴密なる遂行等の問題に關聯する。旣に屢、傳へられてゐるが如く、 の體得の問題が力説せられねばならない狀態に陷つてゐる。(註五四)との問題は結局勞働の生産性の增進、換言すれ 達成し、一歩も前進することが出來なかつたのである。」(駐室)と述べてゐるが、第二次五ケ年計畵に於いては技術 た數百萬の勞働者及びコルホズ員の活動、克己、熱意及び創意にあり、若し斯かる事實なきときは、我等は目的を スターリンは第一次五ケ年計畵の總算に關する報告の結論に於いて、「黨が五ケ年計畫四ケ年遂行の大事業に 於 い ソヴ、ート五ケ年計畫の現在、第二次五ケ年計畫の當面の問題の内で特に顯著なものは技術の體得の問題である。 以上主としてソヴェートの技術論を紹介したのであるが、此處に簡單に結論を附け加へて置かうと思ふ。 決定的及び歴史的捷利を擧げた原因は、第一に社會主義競爭及び模範部隊制の擴大に、偉大なる努力を發揮し しかし他の一半、そしてそれが遙かに重要であるのであるが、それは

得の問題は、 移動率の逃だ大なる事實の裡にも反映してゐる。かくて第二次五ケ年計畵の當面の厄介な問題とせられた技術の體 勞働者の勞働態度の如何にかゝつてゐると見なければならぬ。そしてこのことはまた從來ソヴェー 勤勞者の勞働態度の問題、短言すれば勞働の質の問題と最も重要な關聯にある。 トに於ける勞働

註五三 ソヴェート聯邦事情 第四卷 第三號 三四頁。

註五四 同誌 八一一二頁參照。並に同誌 第五卷 第二號 二一頁以後參照。

るに過ぎない。勞働態度の問題は決してかくの如き强行對策に依つては未だ真の解決に達し得ない。 勞働政策は未だ問題の本質に觸れては居らず、むしろそれは單に過渡期的現象に對する最も苦肉な一時的應救策た でない者は、單に罷免せられる許りではなく、その食料と住居との保證を奪はれる。(註五)しかしかくの如き强行 極度に達し、例へば一九三二年十一月十五日の法令に於いては、假令一日にもせよ正當なる理由なくして業務に出 ある。が勞働態度の問題はそう直ちには解決し得られない。これに對するソヴェート最近の勞働政策の强化は正に 勿論、技術の體得の問題が單に勞働者の技術的知能と技能の問題に過ぎないとすれば、その解決は比較的容易で

第四卷 第二號 二六頁以後及び三九頁以後の二つの論文を參考。

れ自身が繁榮せめられる程度に應じて勞働に對する彼等の態度も自ら變化し來るであらう。かくて問題は一般的に てゐる。そしてそれは結局勞働者の經濟的物質的生活の發展と最も直接的に結びついてゐる。勞働者各人の生活そ 勞働態度の問題は、私の旣に述べたやうに、勞働條件の改善、生活手段の增大、文化水準の向上に條件づけられ

ソヴェート五ケ年計画さその技術論

ト五ケ年計畵さその技術論

働が生活上の要求となる」が如き完全なる狀態は、それからまだ後に達せられる處に在る。 化が、假令その物質的生活に相應するものとは云へ、尙ほ相當年月を必要とするであらう。況んや究局「人間の勞化が、假令その物質的生活に相應するものとは云へ、尙ほ相當年月を必要とするであらう。況んや究局「人間の勞 の向上勤勞階級の文化的水準の向上を伴つたけれども、尙ほ未だ直接彼等の物質的生活の水準を多く引上げてはゐ **於いてはソヴェート勤勞階級の物質的生活は益・豊富にせられて行くであらう。しかしまた彼等の勞働態度の質的變** それは「九三二年度の生産に對しては各、二〇九・四%、及び二六八・八%の割合である。(註五)かくて近き將來に までには生産手段の生産は四八・四、消費手段の生産は五四・三〇一九二六、七年度價格による十億留單位)であつて、 ない。勿論其處ではソヴェートの現狀と相對的に輕工業よりも重工業が重要視せられる必要があつたとは云へ。第 一次五ケ年計畵に比較して第二次五ケ年計畵は反對に重工業よりも輕工業が重視せられてゐる。即ち一九三七年末一次五ケ年計畵に比較して第二次五ケ年計畵は反對に重工業よりも輕工業が重視せられてゐる。即ち一九三七年末 は生産力の増進に依つて――勞働態度の問題はまた反對に生産力の増進に重要な影響を持つものである――條件づ がソヴェート第一次五ケ年計畫の技術的變革に依つで達せられた限りの生産力の増進は、三面勞働條件

東距飜譯通信一第百三十九號 一五十六頁。

示すであらう。何んとなれば第一次五ケ年計畵に於いては旣に重工業方面に於いては大體工業國としての基礎だけ 割合に決定するかど、ソヴェート當面の問題としては最も重要なものとなる。そしてそれは今後益々その重要性を は、末だ充分ならすとも確立されたのであるから。かくてこの問題は社會主義建設途上に於ける勤勞階級の勞働態 共處で現實の問題としては、有ゆる問題を考慮して後、尙ほ重工業部門の生産と輕工業部門の生産とを如何なる

在をすら問はなかつたのは事質である。 不可能の理論的問題だとは考へられない。 要問題である。勿論それは勞働態度に關する人的技術の理論的問題として甚だ容易な問題ではない。がしかし解決度に關する人的技術の問題と直接關聯し、ソヴェート技術理論に於いて先づ理論的に解決せられなければならぬ重 唯だ不幸にして從來人的技術を論ずるものが、多くかくの如き問題の所 -昭和九年二月十四日稿了